

# **島本町文化財調査報告書**

**第3集**

**山崎東遺跡範囲確認調査概要報告**

**平成14年3月**

**島本町教育委員会**

# **島本町文化財調査報告書**

**第 3 集**

**山崎東遺跡範囲確認調査概要報告**

**平成 14 年 3 月**

**島本町教育委員会**

## 序 文

古来より交通の要衝として栄えてきた島本町には、先人たちが大切に遺してきた数多くの文化財があります。本町の東北端に位置し京都府との府境に面します山崎地区についても、山城国府跡・山崎津跡・相応寺跡をはじめとするたくさんの遺跡が所在する大山崎遺跡群に隣接する考古学的にも重要な地域です。本書は、この山崎地区の埋蔵文化財の状況を把握することを目的に国庫補助事業として実施した遺跡範囲確認調査の成果を報告するものであります。

調査にあたりまして多大なご指導ご協力を賜りました柴田土地建物株式会社ならびに地元山崎自治会、大阪府教育委員会をはじめとする関係諸機関の皆様には深く感謝しお礼申しあげますとともに、本町の今後の文化財保護行政に対し、変わらぬご理解とご支援を賜りますようお願い申しあげます。

平成14年3月

島本町教育委員会

教育長 吉田 博

## 例　　言

1. 本書は、平成 13 年度国庫補助事業として、大阪府教育委員会事務局文化財保護課の指導のもと、島本町教育委員会が実施した遺跡範囲確認調査における概要報告書である。
2. 調査は、島本町教育委員会事務局社会教育課野口尚志を担当者として、平成 13 年 10 月 30 日に着手し、平成 14 年 3 月 29 日をもって終了した。
3. 本書に用いた標高は、東京湾平均海面 (T. P.) からのプラス値である。また、方位は座標北を基準とする。
4. 本書の編集・執筆は野口が行った。
5. 現地調査の実施にあたっては、柴田土地建物株式会社及び山崎自治会の協力を受けるとともに、現地調査及び整理作業においては関係各機関ならびに下記の方々からは貴重なご指導ご教示を賜った。記してここに感謝の意を表します。(敬称略、順不同)  
福田英人(大阪府教育委員会事務局文化財保護課)、久保哲正(財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)、林 亨・古閑正浩・寺島千春(京都府大山崎町教育委員会事務局)、原 秀樹(財団法人長岡京市埋蔵文化財センター)
6. 現地調査及び整理作業にあたっては、下記の調査員の参加を得た。(順不同)  
久保直子、坂根 瞬

## 目 次

序 文

例 言

目 次

I. 周辺の環境	1
II. 調査の概要	4
1. 検出遺構	4
2. 出土遺物	8
III. まとめ	11

## 挿 図 目 次

第1図 調査区位置図 (1 / 5000)	1
第2図 平面図	4
第3図 断面図	5
第4図 石組み遺構 S X 0 1 平面図・断面図	7
第5図 石組み遺構 S X 0 1 出土遺物	8
第6図 溝 S D 0 2 出土遺物	8
第7図 石組み遺構 S X 0 1 出土瓦	9
第8図 包含層出土遺物	10

## 図 版 目 次

図版 1 調査区全景

    調査区全景（南から）

    調査区全景（東から）

図版 2 断面

    西壁断面（遠景）

    西壁断面（近景）

南壁断面（遠景）

南壁断面（近景）

図版3 石組み遺構

石組み遺構 S X 0 1 (北から)

石組み遺構 S X 0 1 (南から)

図版4 出土遺物 1 (石組み遺構)

図版5 出土遺物 2 (溝)

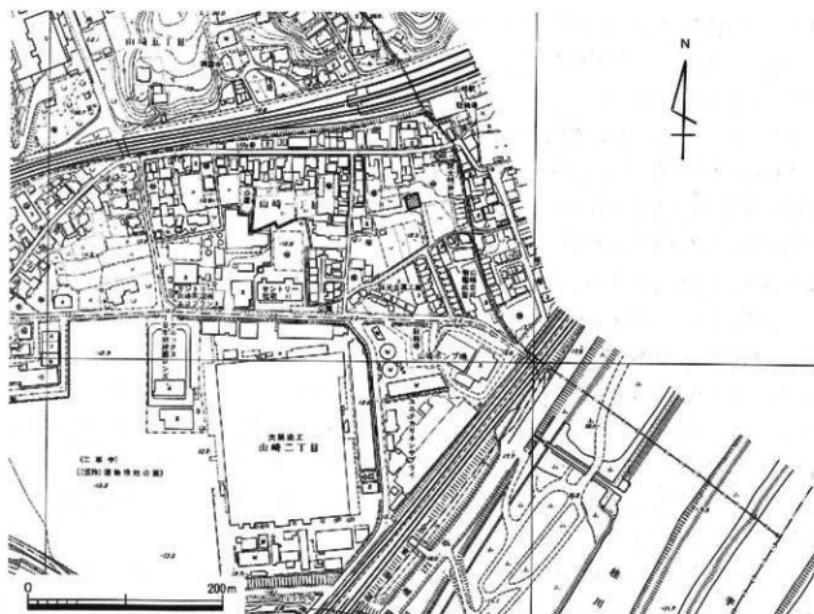
図版6 出土遺物 3 (包含層)

図版7 出土遺物 4 (瓦)

# I. 周辺の環境

## 地理的環境

島本町は大阪府の北東端にあり、京都府との府境に位置する。面積は 16.78km<sup>2</sup>である。北は京都市西京区・長岡京市、北東は大山崎町、東は八幡市、東南は枚方市、西は高槻市にそれぞれ隣接する。町域の東南部は京都盆地の南西より流れ出た桂川・宇治川・木津川の三川が合流して淀川となり南流する。地形的には町域の北西部 3 分の 2 が丹波高原の延長である西山山塊とそこから突き出た天王山山地であり、東南部 3 分の 1 が淀川に接した平野部となっている。標高は最低が淀川で 9 m、最高が駅迎岳の 631m を測る。また、淀川をはさみ南方から生駒山地の延長である男山丘陵が張り出しているため、大阪平野と京都盆地はわずか 1 km ほどの山崎狭隘部だけで接続することとなる。このような地理的位置は先史時代から現代にいたる島本町の歴史の発展を支える重要な条件となってきた。そして、この地理的位置の重要性は交通関係位置に集中的に表現されてくる。淀川は水源地である琵琶湖と結び琵琶湖淀川水系として日本海・東日本と瀬戸内海・西日本を結ぶ日本最大の交通動脈となり、経済・文化の形成に重要な役割を果たしてきた。また、



第1図 調査区位置図 (1 / 5000)

古代第1級国道である山陽道が通過することにより、この交通の要衝としての地理的意義は長岡京・平安京遷都後さらに重要度を増すこととなった。現代においても、日本の東西交通の大動脈である名神高速道路や東海道新幹線・JR東海道本線をはじめ、京阪神を結ぶ国道171号線・阪急京都線が通過し、その意義は変わりない。

調査地は、この山崎狭隘部に位置し、東に西谷川が流れその扇状地の下部に立地する。天王山から延びた尾根筋の先端西側にあたり、これより南は低湿地となる。西谷川は大阪・京都の府境であるが、近世以前についての摂津・山城の国境は明確でなく、調査地付近と想定されている。

### 歴史的環境

現在、町内には16ヶ所の遺跡が埋蔵文化財包蔵地として周知されている。このまちに人々が生活はじめたのは山崎西遺跡から国府型ナイフ形石器が出土したことから旧石器時代の終わりごろと考えられ、越谷遺跡ではそれに続く縄文時代・弥生時代の土器類が出土している。古墳時代になると越谷遺跡・源吾山遺跡・神内古墳群からは古墳の副葬品と思われる土器や鉄器が出土しており桜井地区の山麓にはいくつかの古墳が存在したと思われる。8世紀に入ると天王山の山麓東大寺地区に鈴谷瓦窯が営まれ、水無瀬川を挟んだ対岸には奈良東大寺の莊園「水無瀬荘」が置かれた。長岡京・平安京に遷都されると淀川の山崎津は表玄関として栄え、『土佐日記』や『更級日記』にその賑わいをみることができる。鎌倉時代には後鳥羽上皇が離宮を造営しこの地をこよなく愛したといわれ、広瀬遺跡からは同時期の遺物が多数出土している。

今回の調査地は島本町の北東端、京都府との府境に面している。調査地周辺である山崎狭隘部の狭い地域には古代より水陸交通の要衝として発展してきたことから様々な施設が所在していた。奈良時代には僧行基により淀川に架けられたといわれる山崎橋やそれに付属する寺院である山崎院も付近にあったと考えられている。長岡京の時代には山崎津が置かれ、都の造営に必要な資材の陸揚げがされ、平安時代になると山崎津は平安京の表玄関として繁栄する。また、山陽道の主要な宿駅である山崎駅が置かれ、嵯峨天皇の河陽離宮はこれを転じたものといわれる。この離宮はさらに転用され第4次山城国府となった。また、紀貫之が『土佐日記』に記した相応寺もこのあたりにあったものと推定される。中世になると荏胡麻油の生産が盛んとなり離宮八幡宮を中心に油座が結成され、のちには時の権力者と結び西日本の油の専売権を持つほどの大きな組織となつた。山陽道（江戸時代には西国街道として継承される）もすぐ北側を通過し、その関所の跡といわれる関大明神社は調査地に隣接している。

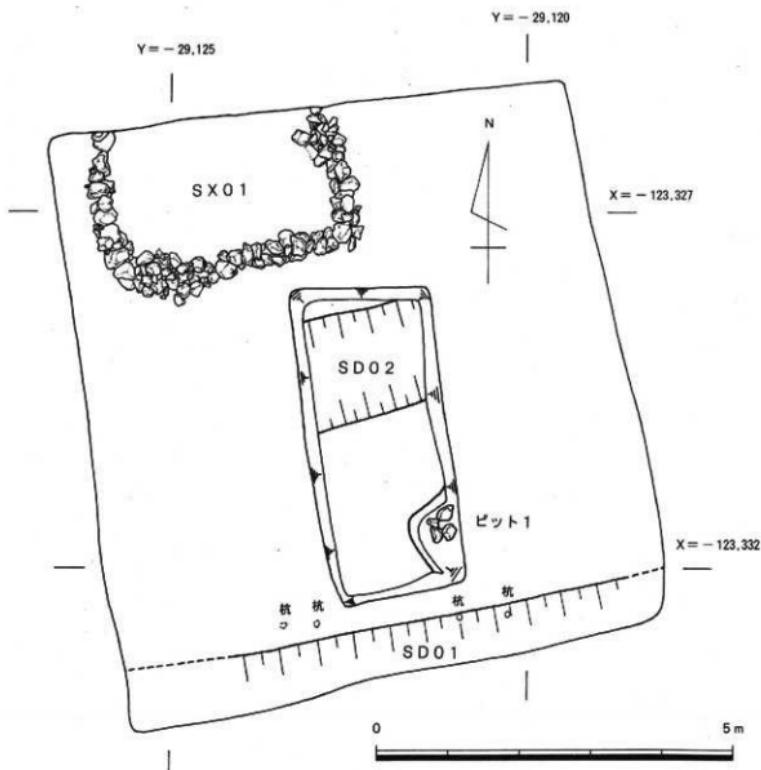
このように、調査地周辺には古代から各時代の遺跡が複合的に所在するものと考えられ、隣接する大山崎町では考古学的に最も最重要地区として調査に力を入れてきた。しかし、島本町側の山崎地区では埋蔵文化財包蔵地外であったこともあり、同地域についての考古学的データの蓄積が

されていなかった。そこで、島本町教育委員会では山崎地区の遺跡の所在や範囲・内容の確認を行うことを目的に平成13年度より国庫補助事業として遺跡範囲確認調査事業を行うこととした。

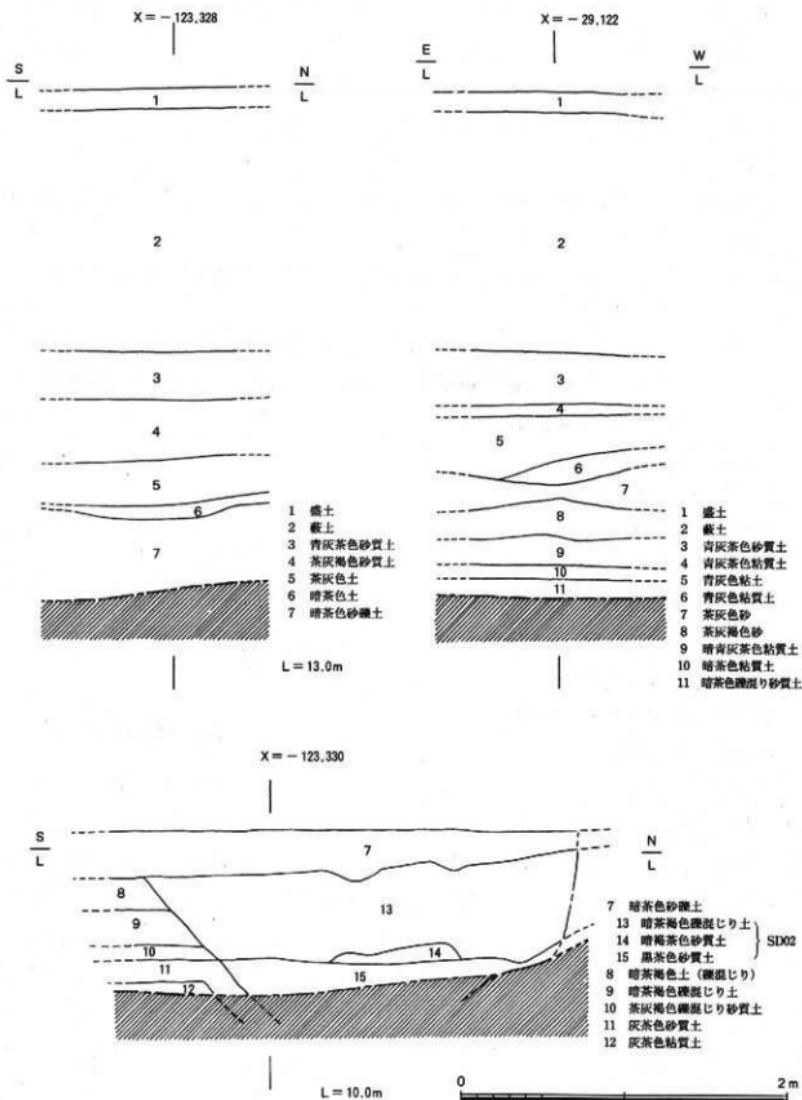
## II. 調査の概要

### 1. 検出遺構

今回の調査は、山崎地区の遺跡の範囲を確認するとともに、当該地において計画されている宅地開発の事前の試掘調査を兼ねたものとして実施した。このことより、当初は層序の確認を中心とした幅2m 総延長60mの調査区を計画した。事前に試掘坑を2ヶ所設定し掘削を行った結果、当初地山層まで最も深いところで地表下2.5mを想定していたが、地表下4.1mで中世(室町期)の遺物包含層が確認され、このままでは地山層まで5m以上あると考えられ、計画している調査区では壁面が崩落するなど大変危険であると判断し、最も浅いと考えられる地区での調査に変更



第2図 平面図



第3図 断面図

することにした。しかし、ここでも実際に調査してみると試掘坑でのデータより深く地山層まで4mを越えるものであった。よって、調査区全体を地山層まで下げるこことを断念し、一部で地山層を確認するにとどまった。

このように、限られた条件のもと検出された遺構は次のとおりである。

### 基本層序

今回の調査区の基本層序は次のとおりである。基本層序は西壁断面及び断割り西壁断面を基準としている。

**第1層** 調査地は今回の調査前まで月極め駐車場であったが、本層はそれ以前に営まれていた耕作土である。

**第2層** 蔽土。江戸時代から明治時代にかけて調査地周辺は竹蔽があったことは、『洛外図』（江戸時代初期）『山崎通分間延絵図』（江戸時代中期）や旧山崎村の地割絵図（明治時代初期）などからも分かる。

**第3層** 青灰茶色砂質土

**第4層** 茶灰褐色砂質土

**第5層** 茶灰色土

**第6層** 暗茶色土

近世

**第7層** 暗茶色砂礫土

**第8層** 暗茶褐色土（礫混じり）

} 中期（室町期）

**第9層** 暗褐茶色礫混じり土

**第10層** 茶灰褐色礫混じり砂質土

} 中世（鎌倉期）

**第11層** 灰茶色砂質土

古代（平安期）

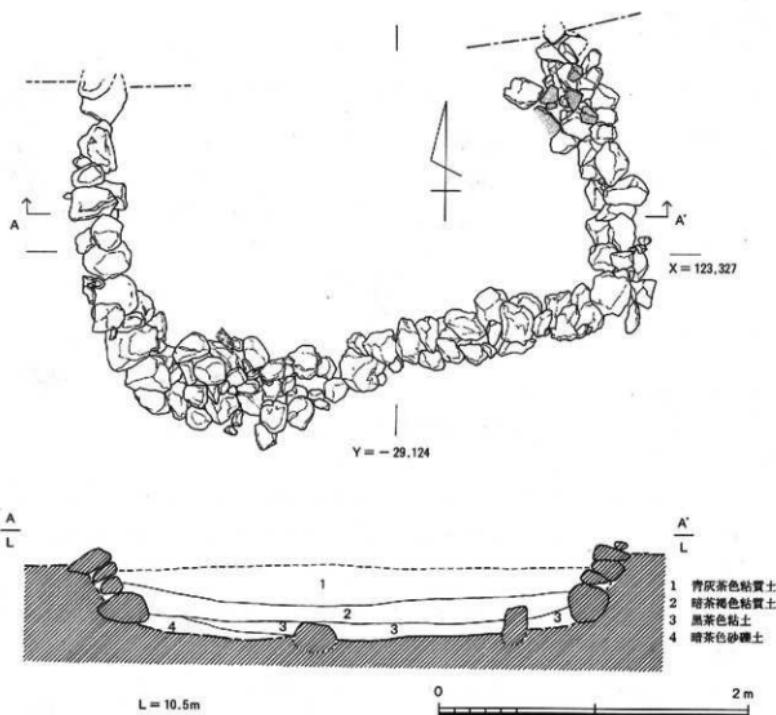
**第12層** 灰茶色粘質土

### 石組み遺構S X 0 1

調査区北端にて検出。東西3.8m、南北検出長2.5mを測る。ただし同遺構は北側へ延びており遺構全体の規模は不明である。石積みは検出された分で4段を確認できる。石は調整面を内側に向けており、内側を意識して配列されている。内部からは本遺構が破棄されるときに投棄されたと思われる木製部材が多量に出土した。遺構の性格については、京都市内での調査でよく見られる石積みの地下式貯蔵庫ではないかと考えられる。遺構の時期については石組内部や周辺部から出土した土器から近世のものと考えられる。

### ピット1

調査区中央断割りの南端にて検出。湧水が激しく平面プランは確認できなかったが、柱根の一部と根石が確認された。根石は犬の頭大の自然石4個を並べたもので、湿地帯が迫る当該地では



第4図 石組み遺構SX01平面図・断面図

柱の安定を図ることが重要であったと思われる。他に同様のピットが明確に確認できなかったため、建物の規模・方向等は確認できなかった。

#### 溝SD01

調査区南端にて東西方向に検出。北側肩部のみの確認のため溝かどうか不明である。周辺地形を考えると淀川・水無瀬川による低湿地が調査区南側に広がっていたと考えられ、これらとの境界であった可能性も考えられる。なお、護岸のためと考えられる杭列が確認された。時期は石組み遺構SX01とおおよそ同じと考えられる。

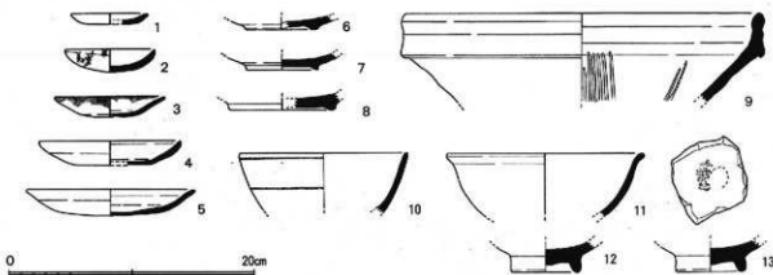
#### 溝SD02

調査区中央に設定した断割りにて検出。検出幅は2.7mを測る。東西方向の溝と考えられる。中世（室町・鎌倉期）の遺物を多量に含んでいる。

## 2. 出土遺物

### 石組み遺構 S X O 1

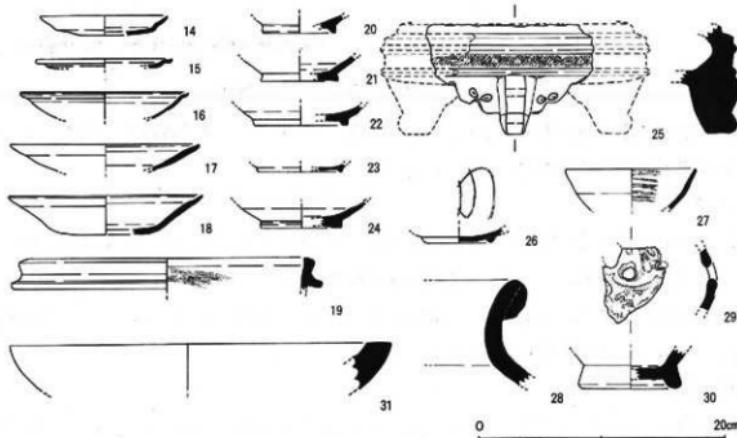
近世のものが大半である。1～5は土師器皿、2・3は灯明皿。6～8は平安時代の緑釉陶器の底部、6・7の焼成は硬質、8は軟質に分けられる。9は備前系の擂鉢。10～13は中国製青磁。



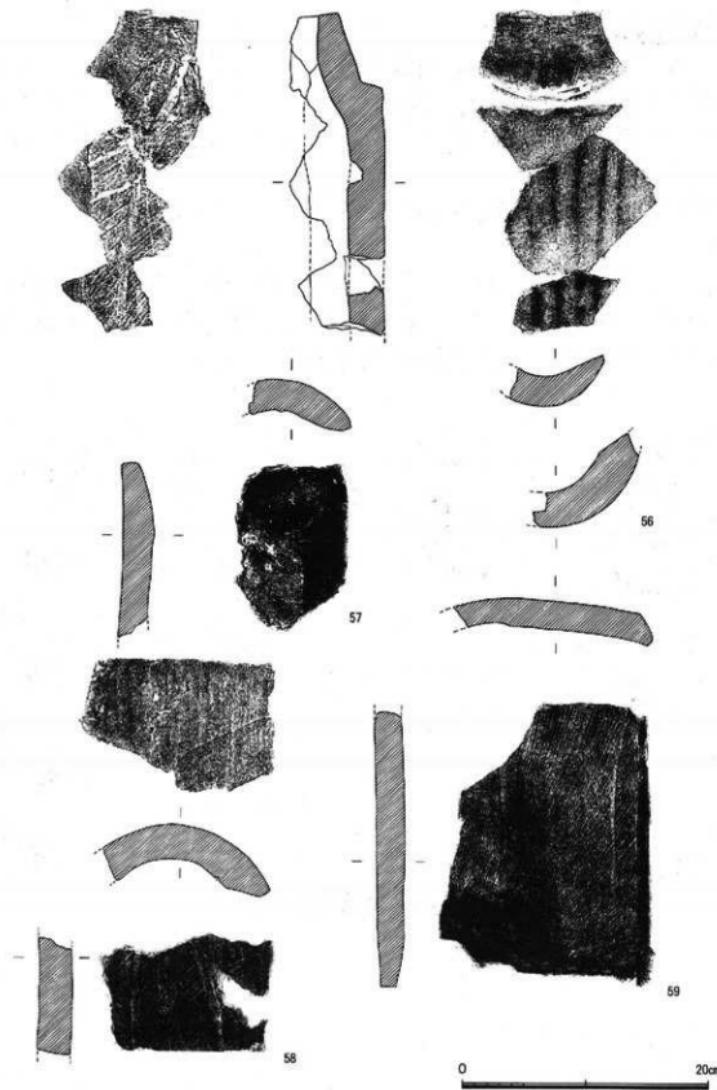
第5図 石組み遺構 S X O 1 出土遺物

### 溝 S D O 2

平安時代～中世のものを中心として出土。14～18は土師器皿、19は土師器羽釜。20～22は平安時代の須恵器の底部。23は黒色土器の底部、内面のみ炭素を吸着させたA類。24は緑釉陶器の底部、焼成は硬質。25は瓦質、風炉の底部。26は瓦器椀の底部、見込み部に螺旋状の省略された暗文が見られる。高台は低く退化した断面三角形。27は瓦器椀口縁部、内面に暗文が見られる。28は国産陶器、常滑窯産の壺。30は壺の底部。29は中国製磁器、青磁、器種不明。31は滑石製



第6図 溝 S D O 2 出土遺物



第7図 石組み遺構SX01出土瓦

石鍋。

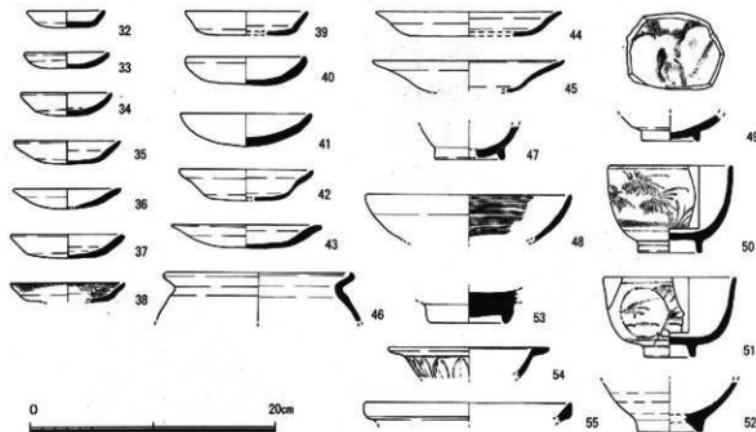
#### 石組み遺構 S X 0 1 出土瓦

56～58は丸瓦。56、凸面はミガキで全面を調整するもの一部に繩叩き痕が残る。玉縁部凸面はヨコナデで調整。凹面には布目痕が残る。57、凸面はミガキで全面を調整するため整形痕は不明。凹面には布目痕が残る。58、凸面はミガキで全面を調整するもの一部に繩叩き痕が残る。凹面には布目痕が残る。

59は熨斗瓦か。凸面はタテナデで調整され、側縁は面取りがなされる。

#### 包含層

32～45は土師器皿。46は土師器甕。47は須恵器壺。48は瓦器椀、内面に暗文が見られる。外面は口縁部にヨコナデを施す。50～52は国産陶磁器。52は唐津の椀、50・51は肥前系の染付けの椀。53～55は中国製磁器、53は青磁碗、55は白磁碗。



第8図 包含層出土遺物

### III. まとめ

今回の調査地は西谷川の扇状地の根部に位置することや淀川・水無瀬川の低湿地が迫っていたことなどから湧水が激しく、24時間ポンプによる排水を行うなど湧水対策に追われることとなつた。実際には沼の中で調査を行っているようなもので、常に表面に水があるため平面での精査が行えず遺構の確認が十分に行えなかつたが、当該地域の層序がある程度確認できたことで一定の成果を得ることはできた。

まず、調査地は史料によれば近代（明治期）は竹藪であったことが知られているが、近世（18世紀ごろ）に描かれた『山崎通分間延絵図』では一部に竹林が描かれているものの南側は田あるいは低湿地のようで、調査の結果を見ても調査地のすぐ南まで低湿地が迫っていた可能性が高く、史料を裏付けたものとなつた。そして、近世には石組み遺構 S X 0 1 やピット 1 などの遺構が存在し水際まで施設が建ち並んでいたことが確認された。

中世期については遺物包含層や溝 S D 0 2 が検出され多くの土器類が出土した。これらの中には中国製の輸入磁器も多く含まれており、油座を組織した神人たちが活躍したこの時期の山崎の繁栄ぶりがうかがえる。

中世以前については、平安時代の土器が出土する遺物包含層が確認されたが、それ以前については、平安時代以降に当地周辺に多くの重要施設が置かれたため、土地の改変が頻繁に行われたと思われる。よって、それに伴う削平のため遺構等については今回は確認することはできなかつた。

以上のように今回の調査では平安時代まで人々の生活があったことが確認され、基本的な層序が得られた。今回の調査だけでは山崎地区の遺跡の範囲や内容をつかむことはできないが、今後の調査データの蓄積により少しずつ明らかになることと思われる。これからも同地区的調査を重ね、貴重な文化財の保護に役立つよう努めていきたい。

## 報告書抄録

ふりがな	しまもとちょうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	島本町文化財調査報告書
副書名	山崎東遺跡範囲確認調査概要報告
卷次	
シリーズ名	島本町文化財調査報告書
シリーズ番号	第3集
編著者名	野口尚志
編集機関	島本町教育委員会事務局 社会教育課
所在地	〒618-8570 大阪府三島郡島本町桜井二丁目1番1号 TEL 075-961-5151
発行年月日	平成14年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やまざきひがし いせき 山崎東遺跡	しまもとじょうやしき 島本町山崎一丁目 1052, 1053, 1054, 1055, 1056	27301	20	34° 53' 16"	135° 40' 53"	2001.10.30 ~ 2001.12.27	50	遺跡範囲 確認調査

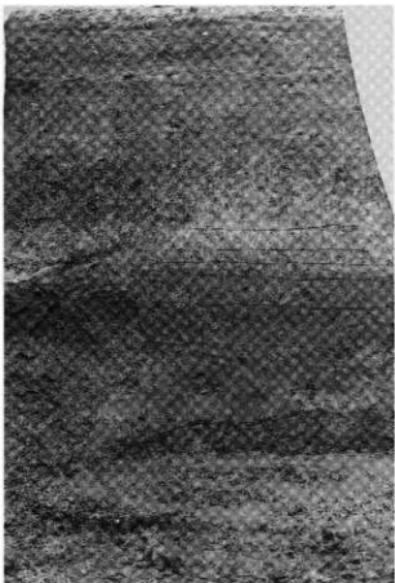
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山崎東遺跡	集落	平安時代 ~ 江戸時代	石組み遺構、溝	土師器、須恵器、綠釉陶器、瓦器、国产陶磁器、中国製陶磁器、瓦他	



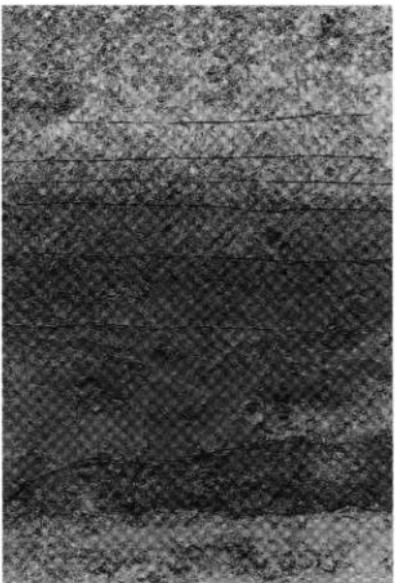
調査区全景（南から）



調査区全景（東から）



西壁斷面（遠景）



西壁斷面（近景）

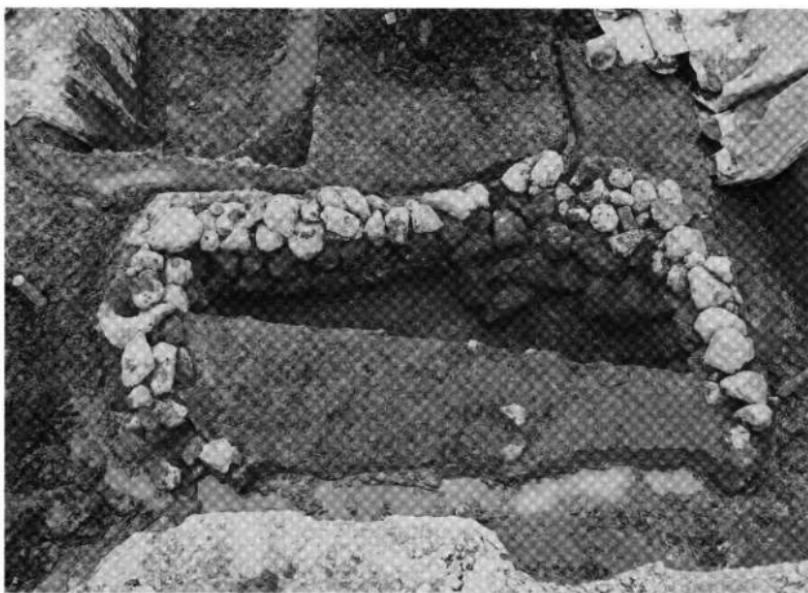


南壁斷面（遠景）



南壁斷面（近景）

図版3 石組み遺構



石組み遺構 S × 01 (北から)



石組み遺構 S × 01 (南から)

図版4  
出土遺物（石組み遺構）



2



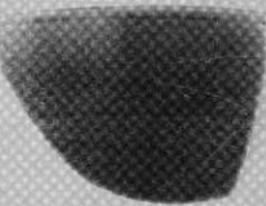
3



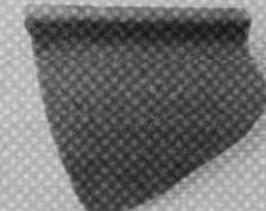
7



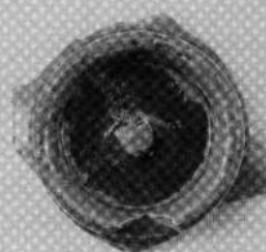
8



10

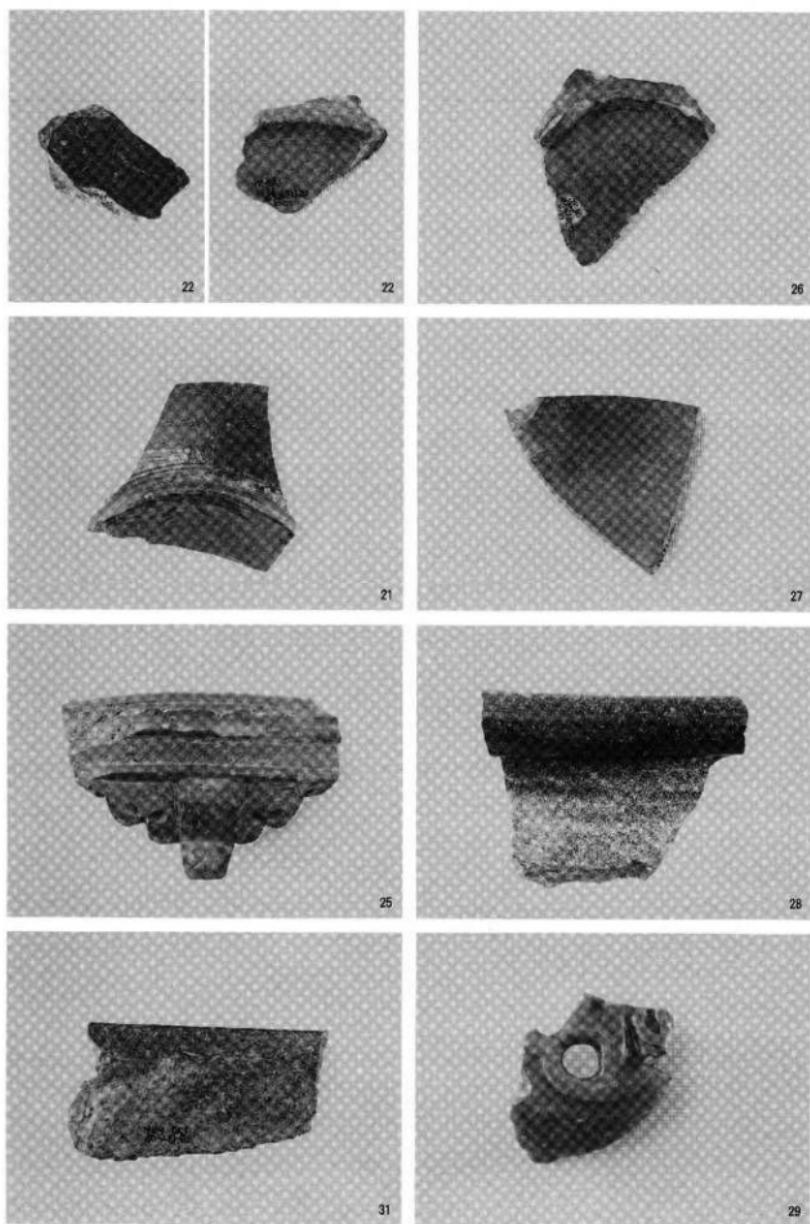


11



13

圖版 5 出土遺物（漢）



圖版 6 出土遺物（包含層）



32



33



34



49



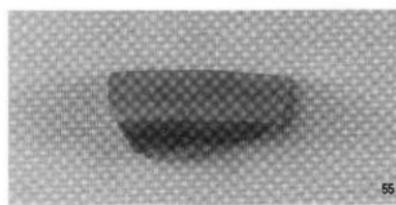
37



50



54

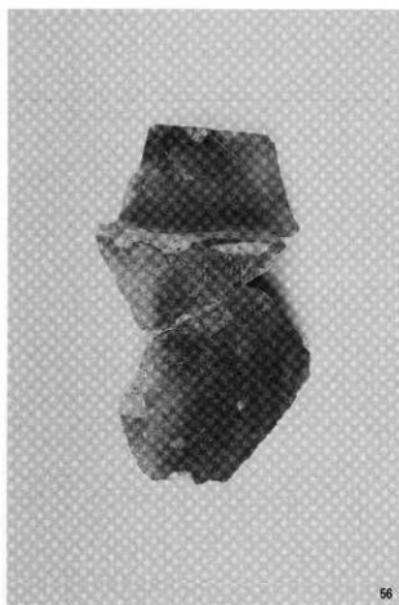


55

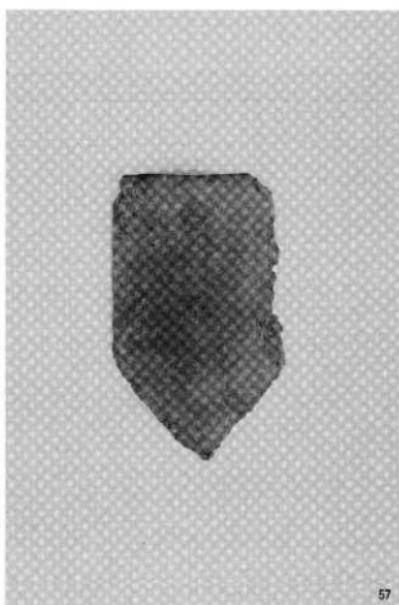


51

圖版 7 出土遺物（瓦）



56



57



58



59

島本町文化財調査報告書  
第3集

発行 烏本町教育委員会  
〒618-8570 大阪府三島郡烏本町桜井二丁目1番1号  
TEL 075-961-5151

発行日 平成14年3月29日

印刷 野田印刷有限会社  
〒618-0013 大阪府三島郡烏本町江川二丁目1番16号  
TEL 075-961-6460

